

本文（笈の小文）

（小学館『新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集（2）』による）

鳴海にとまりて、

星崎の闇を見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章（あすかひまさあき）公の此宿にとまらせ給ひて、「都も遠くなる
みがたはるけき海を中にへだてゝ」と詠じ給ひけるを、自かゝせたまひてたまは
りけるよしをかたるに、

京まではまだ半空や雪の雲

三川（みかわ）の国保美（ほび）といふ処に、杜国（とこく）がしのびて有け
るをとぶらはむと、まづ越人（ゑつじん）に消息して、鳴海より跡ぎまに二十五
里尋かへりて、其夜吉田に泊る。

寒けれど二人寐（ぬ）る夜ぞ頼もしき

寒けれど・・・句碑（神明社 豊橋市湊町）

あま津繩手、田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き所也。

冬の日や馬上に氷る影法師

冬の日や・・・句碑（宝林寺 豊橋市杉山町）

保美村より伊良古崎へ壺里斗も有べし。三河の国の地つゞきにて、伊勢とハ海
へだてたる所なれども、いかなる故にか「万葉集」にハ伊勢の名所の内に選入ら
れたり。此州崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや。骨山（こつやま）
と云ハ鷹を打処なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いら
ご鷹など哥にもよめりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし、

鷹一つ見付てうれしいらご崎

鷹一つ・・・句碑（伊良湖岬 田原市伊良湖町、句は横面にある）
熱田御修復

磨（とぎ）なをす鏡も清し雪の花

蓬左（ほうさ）の人々にむかひとられて、しばらく休息する程、

箱根こす人も有るらし今朝の雪

有人の会

ためつけて雪見にまかるかこみ哉

いざ行む雪見にころぶ所まで

ある人興行

香を探る梅に蔵見る軒端哉

此間、美濃大垣・岐阜のすきものとぶらひ来りて、哥仙あるハ一折など度々に及。

師走十日余、名ごやを出て旧里に入んとす。